

南アジア・イスラーム研究の動向と将来——『加賀谷寛著作集』を通して

山根 聡

加賀谷寛大阪外国語大学名誉教授は、わが国で南アジア・イスラーム研究を牽引してきた人物として知られ、数多くの研究成果を残してきている。このたび、日本オリエント学会において、加賀谷先生に対し第4回三笠宮オリエント学術賞が授与された。小文では同先生の業績を通して、南アジア・イスラーム研究の歴史と今後の研究の可能性について紹介する。

加賀谷寛先生は、1930年に東京生まれ、1954年に東京外国語大学ヒンドスタン語学科を卒業、1956年に東京大学大学院人文科学研究科修士課程を修了後、東京大学東洋文化研究所助手、テヘラン大学留学(-1958年)を経て1961年、大阪外国語大学インド語学科および新設のペルシア語学科の講師(兼任)に着任、以後1996年までの35年間、同大学においてウルドゥー語、ペルシア語教育とともに、南アジアの文化に関する講義を行った。途中、1975年から76年にかけて、国際交流基金の派遣により、パキスタン・ラーホールのパンジャブ大学オリエンタル・カレッジに日本語教員として派遣された。1996年に大阪外国語大学を定年退職、同大学名誉教授となって、同年関西外国語大学特任教授、翌97年から2001年まで追手門大学文学部教授を務めた。長年のウルドゥー語と南アジアの文化に関する教育と研究への貢献により、2007年、パキスタン大統領より「カーイデ・アーザム勲章」が、2010年には瑞宝中綬章が授与された。このように加賀谷先生は、20世紀後半を中心、一貫して南アジア・イスラーム研究を続けてきたのである。



南アジア・イスラーム研究の歴史

加賀谷先生の時代は、南アジア・イスラーム研究の大きな発展期でもある。1938年、回教圏研究所が設置され、蒲生礼一(1901-1977)東京外国語大学教授(当時。東京外国語大学名誉教授)が参画すると、南アジアのイスラーム文化を紹介するエッセイや、ウルドゥー語の文学作品の翻訳『四人の托鉢僧の物語』などが出版された¹⁾。先生が南アジアにおけるイスラームの重要性を強く意識されていた学生時代、アラブではアラブ・ナショナリズムが高揚し、アジア・アフリカ諸国でも民族主義が大きくなっているを持っていた。そんな時、「ムスリム」をヒンドゥーとは異なる固有の「民族」として規定し、民族自決主義に基づいた「二民族論」によって、独立国家パキスタンが、イスラーム国家として産声を上げたのであった。1947年のインド・パキスタン分離独立は、イスラームを紐帯とする国家パキスタンの建国という、南アジアにおけるムスリムの政治運動の頂点を示す歴史的な事件であった。南アジアを自らの研究対象地域と決め、イスラームを深く学ぼうとされていた時代に、イスラームを紐帯とする国家が建設されるという大きな衝撃は、若き加賀谷先生にとっていかに

1) 同書は後に平凡社東洋文庫から再版された。

なる衝撃であったろうか。おりしも、ギブヤスミスといったイスラーム研究の碩学が、南アジアのイスラームの諸相に関心を持ち、それを論じながら、スミスのように実際にラーホールに住んでマウドゥーディーら思想家、運動家と交際しながら、その後に訪れるであろう世界的な潮流となるイスラーム復興の最初の静かなうねりを、南アジアの小国の中で感じ取っていたのである。

1954年、加賀谷先生は東京大学大学院に進学されたとき、同大学では「インド史研究会」が発足した。翌55年、加賀谷先生は学友とともに『インド・イラン評論』を創刊、アジア・アフリカ研究会も発足してイスラーム研究もこうした研究活動のなかで育まれていった。学生時代を過ごした1950年代について、加賀谷先生は次のように述懐している。

「1950年代、バンドン会議に見られたように反帝国主義の民族運動が高揚していた時期で、現代アジアの民族運動が世界史を切り拓くように感じられた」（「定年退官を迎えて」〔加賀谷 2014: 384〕）

「1950年代末に学生時代と大学研究所の若い助手世代に恵まれた私が先ず強く感じたことは……欧米側の研究者の間からは、近代の独善的な「ヨーロッパ中心主義」でなく、相互不信に代わる相互理解の必要が新しい問題意識として提出され始めていた時代であった」（「現代の中東・イスラーム世界への視点」〔加賀谷 2013: 526〕）

戦後間もない日本の社会にあって、他国との相互不信から相互理解へと転換する姿勢は、アジアの民族運動や南アジアのイスラームという活力を帯びた動態への関心を集めることとなったのであった。

1959年には東京大学の荒松雄助教授（当時、東京大学名誉教授）によるデリー遺跡調査（-1962）が開始され、詳細な報告書『デリー』等が次々に刊行されたことは、南アジアにおけるイスラーム文化を建造物から解明する動きとして重要であった。

加賀谷先生が大阪外国語大学に着任されてまもなく、1970年代に南アジア研究会（関西）が発足、大阪市立大学や追手門大学、同志社大学など関西圏の研究者と学生によって、研究成果発表の場が設けられたが、こうした機会が共同研究へとつながり、大阪外国語大学でのヒンディー語、ウルドゥー語文献など現地語資料の収集が実施されたが、この時に加賀谷先生や浜口恒夫先生（大阪外国語大学名誉教授）によって、南アジア・イスラーム研究に関する貴重な図書が収集された。1970年代のオイルショックにともない、中東研究への関心が高まったが、1979年のイラン革命やソ連軍のアフガニスタン侵攻によって非アラブ圏におけるイスラーム研究にも関心が向けられるようになった。70年代、アジア経済研究所によってパキスタンに関する総合的研究が刊行されたが、加賀谷先生はこの中でイスラーム思想についての紹介を行うなど、現代南アジア政治におけるイスラームの位置づけについての議論を行った。

1980年代に加賀谷先生や浜口恒夫先生、桑島昭先生（大阪外国語大学名誉教授）など南アジア研究者が、中国研究者や東南アジア研究者とともに設立した「大阪外国語大学アジア太平洋研究会」は、特に現代アジア研究への関心を高め、アジア全体としての歴史を描出する試みを行った。1940年代におけるアジアの歴史年表等、アジア諸国の国家観を比較する研究など、現在のグローバル・ヒストリーの源流ともいえる研究活動が可能であったのは、外国語大学として異なる地域の文献を交錯させることができたことが背景にあったと考えられる。加賀谷先生は、この研究会の活動において、南アジアのムスリム思想運動などの研究を深めた。

1982年、東京大学にイスラーム学研究室が設置されたことは、わが国におけるイスラーム研究者の育成にとって大きな弾みとなった。それまで歴史学や政治学、文学等の枠組みのなかで研究され

ていたイスラームが、イスラーム学として独立を果たしたのである。1987年には日本南アジア学会が設立され、南アジア・イスラーム研究者にとっては全国的な地域研究の学会において研究成果の発表の場を得ることができるようになった。科学研究費による「比較の手法によるイスラームの都市性」に関する総合的研究(通称「イスラームの都市性」)プロジェクトや、文部省の新プログラム方式による地域研究「現代イスラーム世界の動態的研究——イスラーム世界解明のための情報システムの構築と情報の蓄積」(通称「イスラーム地域研究」)など、1980年代にはイスラーム諸地域の比較研究が盛んとなり、南アジアもその研究対象となった。それまでの南アジア・イスラーム研究は南アジア研究のなかの一部として扱われたが、イスラームの諸地域に関する研究の進展が、南アジア・イスラーム研究をイスラーム地域研究の中に定着させることとなった。

その後の南アジア地域研究、イスラーム地域研究のめざましい発展は言を俟たないところである。1998年、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)において、京都大学でもイスラーム研究が本格化した。2006年の人間文化研究機構(NIHU)プログラム「イスラーム地域研究」発足にともなう京都大学イスラーム地域研究センター設置、早稲田大学イスラーム地域研究所設置、上智大学イスラーム研究センター設置、早稲田大学アジア・ムスリム研究所設置などはイスラーム地域研究のさらなる展開をもたらした。他方2010年には人間文化研究機構プログラム「現代インド地域研究」が発足、2015年にはその2期目として「南アジア地域研究」が開始され、イスラーム地域研究と南アジア地域研究を接続する人間文化研究機構地域間連携研究推進事業として「南アジアとイスラーム」も発足した。こうして、戦前から80年間に、南アジア研究、イスラーム研究が発展し、その中で南アジア・イスラーム研究も着実に進展したのである。加賀谷先生は南アジア・イスラーム研究を地域研究として位置づけ、「地域研究をもって「現地の言語の学習と一般理論の修得との結合」(ギブ)という要約に私は今も賛成であり」(「定年退官を迎えて[加賀谷2014:385]」)と述べ、多くの論考を発表することでこの分野に貢献したのである。

『加賀谷寛全集』にみる近現代南アジアのイスラーム思想への関心

イスラーム研究、地域研究として南アジア・イスラーム研究への関心が高まる以前は、当該分野の研究成果を発表する場所は大学や研究所の紀要などに限られていたため、加賀谷先生の多くの著作もまた、さまざまな紀要や雑誌等に掲載された。このため、これらの研究成果に目を通すためには、全著作をまとめることが望まれていた。2012年、京都大学イスラーム地域研究センター(KIAS)は人間文化研究機構との連携によって、南アジア・イスラーム研究の知の蓄積をまとめる決定をし、『加賀谷寛著作集』(全3巻)を3年間にわたって刊行させた。

全集は松村耕光氏(大阪大学)、岡本多平氏(KIAS)、内海秀亮氏(KIAS)の緻密な編集作業によって刊行された。また、京都大学イスラーム地域研究センターの仁子寿晴氏(当時)、今松泰氏(当時)、藤院里依子氏(当時)、同センター研究員(当時)の安田慎氏、ASAFAS学生の内山明子氏(当時)、二ツ山達朗氏(当時)のご助力がなければならなかった。全集に含まれなかった著作・翻訳等としては、パキスタン大統領自伝(浜口恒夫先生との共訳)『パキスタンの再建』(1968年、山川出版社)、近現代のウルドゥー文学史であるアブルライス・スィッディーキー著『近代ウルドゥー文学史研究』(1979年、名古屋大学出版会)、見出し語18,000語、複合語27,500語、計45,500語(2005)を含む浩瀚な『ウルドゥー語辞典』(2005年、大学書林)などがあるが、単著、翻訳書を除く著作、分担単著、論文、翻訳、報告等をほぼ網羅的に収載することができた。

加賀谷先生の論考を見渡すと、南アジアの場合、近現代におけるムスリムの主体的な思想や運動

に対する関心が払われていることがわかる。近代化の波のなかで新たに生まれたムスリム知識層の台頭が、南アジアのムスリム社会にいかなる影響を及ぼし、ムスリムとしてイスラーム復興運動やイスラーム国家建設、イスラーム体制確立に向けたいかなる運動を展開したかについて、さまざまな人物、さまざまな運動について考察している。

全集の第1巻『南アジアとイスラーム』(2013年)には論文等40本が収録され、総ページ数が527ページにも及び、その中には「18世紀インド・イスラムの宗教・社会思想——シャー・ワリーウッラーの社会理論を中心として」(1967)、「十八世紀におけるイスラム宗教神秘主義史叙述——ワリーウッラー著 *Hama'āt* 第2章についての一試論、付同章訳」(1977)、「南アジアにおける民衆宗教スーフイズム——聖者崇拜を中心に」(1979)、「19世紀初頭インド・イスラムの聖者崇拜批判——*Shāh Mḥd. Ismā'īl, Tadhkīr al-lkhwān*, 第五章の訳」(1981)、「西アジアにおけるナショナリズム——アフガーニーの「パン・イスラミズム」を中心に」(1960)、「ムスリム連帯の先覚者アフガーニーとインド(1)」(1984)、「19世紀初頭南アジアから海路による集団的メッカ巡礼」(1988)、「現代イスラムの総合研究(1)(2)」(1967, 68)、「ラクナウと周辺に、南アジア・イスラームの多様性の一端を求めて」(2000)などが収載されている。

「現代イスラムの総合研究(1)(2)」は、アジア経済研究所委託研究所内資料として刊行されたもので、現在では入手が極めて困難なものとなっている。その(1)では、現代イスラムの内部構造と類型、近代派イスラムと伝統的イスラム、正統的イスラム、スーフイズム教団、ワッハーブ運動、アル＝アフガーニー、アル＝アズハル大学、デーオバンド神学校、コム神学校、アリーガル運動、アブドゥ、ラシード・レダー、イクバル、アーザード、アル＝イフワスル・ムスリミン、ジャマアテ・イスラミー、バハーイー教会、アフマディー教団などに関する概説と分析が加えられ、(2)では社会集団の諸類型、アサビーヤ(血縁意識、非イスラム的紐帯)、イスラム都市論、フトッワ(フトゥーワ: 若者らしさを意味するイスラーム的倫理)、ムスリム・ギルドなどが紹介されていて、近現代イスラームに関する基本情報が網羅的に盛り込まれた貴重な資料であったことがうかがえる。こうしたイスラーム復興運動に関する思想的特徴を照射しつつ、「南アジアにおける民衆宗教スーフイズム——聖者崇拜を中心に」「ラクナウと周辺に、南アジア・イスラームの多様性の一端を求めて」のように、近現代の政治社会運動とは別の、南アジアでは宗教を超えて支持されている聖者崇拜の実態についての研究によって、南アジア・イスラームの多様性を紹介した。

第2巻『南アジアの政治と文化』(2014年)には論文31本(うち英語4本)、書評6点、エッセイ4点が収載され、「インド・パキスタンにおけるムスリムの現代思想史——1」(1963)、「パキスタンの政治と宗教——「イスラム国家」(Islamic State) 理念について」(1973)、『南アジア現代史Ⅱ』(共著、1977)におけるムスリム思想史、パキスタン国家とイスラム＝イデオロギーなどの部分、「1938年から1947年分離独立に到る時期のウルドゥ語新聞リストとその政治的傾向」(1985)、「政治エリートとしての宗教勢力」(1992)、などの論考が収められている。「パキスタンの政治と宗教——「イスラム国家」(Islamic State) 理念について」(1973)において加賀谷先生は、「わが国において、パキスタン政治研究は、同国の経済研究の進展に比較して、著しく立ち遅れている現状にある。これはインド政治の研究者がパキスタン政治をインド政治に対して従属的、あるいは付随的に取り扱ってきたところに主として起因するものであり、インド政治の研究とパキスタン政治の研究が対等に、パラレルに行われる研究段階にいまわが国の研究が到達していない……本稿は、著者の専攻する現代イスラム思想史の立場から、主として社会思想史的にアプローチして、パキスタン政治の歴史的背景と、その内部構造を明らかにしようとするものである」[加賀谷2013: 58]とし

て、南アジア研究がインド中心の視点で展開されている状況について、特にインド以外の地域が従属的に扱われている点を問題視した²⁾。南アジアにおいてインドが政治的、経済的に大きな影響力を有することは疑いないが、思想や動態、政治経済的な影響力の規模の大小と重要性が別であることもまた明らかであり、特にイスラーム史、現代イスラーム思想史における南アジアの重要性を強調された点は、先駆的であった。

上記論文ではイスラーム近代主義や復興運動の担い手としてのエリート層について触れ、「社会的に分析するならば、『イスラーム近代主義』の担い手は、本来的にムスリムのセクラーナ自由業であり、低開発国のいわゆる middle class に相当する。このことは、植民地エリート、独立後のナショナル・エリートと彼等が重なることを示唆する。この階層とその思想自身も、社会的発展にともなって分化を遂げるものとみなければならない。これに対して、『正統的立場』は聖職者・法学専門職のウラマー(‘Ulamā)によって代表され、政治的に大衆運動を組織し、大衆動員のシンボルを操作するものと捉えられるであろう。ナショナル・エリートに対抗するカウンター・エリートとして機能するサブ・エリートに結びつくと思われる Islamic fundamentalism は、この両者にまたがって、社会体制の危機のなかで躍進するが、これを後者の『正統的立場』に入れることはできない。既述の W.C. スミスも両者を区別して規定したように、『正統的立場』は『保守的』エリートのものであるのに対して、この Islamic fundamentalism は『反動的』エリートのものであるからである」[加賀谷 2013: 61]と論じた。植民地期に台頭し、その後のムスリム社会運動を牽引した新興知識層に対し、「伝統的」で「正統的」なウラマーはその後マドラサなどの宗教施設での活動へと「後景化」していく。この「新興知識層」と「伝統的なウラマー」の両者とからまりながら躍進する復興運動の指導者たちへ関心を払った考察は、アフガニスタンでの対ソ連戦争時のパキスタンでのズィヤール＝ハク政権時のイスラーム化政策におけるジャマーアテ・イスラミーの台頭に先駆けたものであり、近代以降のムスリム社会の変容を思想史として論じたものであった。

「独立後のパキスタンの国家建設——パキスタン国家とイスラーム＝イデオロギー」(1977)では、「パキスタン国家が成立すると、政府と与党ムスリム連盟は微妙なジレンマに立たされた。それは、一方でパキスタン運動が樹立を目指した“ムスリム国家”のイスラーム的性格をはっきりとは否定できず、他方で実質的に世俗的な近代的民主主義国家を志向したことから生じたものである。国家理念としては、分離独立後のインドは政治的コミュニズムを克服するために国家体制から宗教を排除して“政教分離主義”の立場をとったが、反対にパキスタンは“イスラーム国家”をかかげた。そのためにインドは政教分離国家、パキスタンは宗教国家だとは対比され、パキスタン国家のイスラーム的性格が過大に理解されがちである。しかしこの問題を正しくとらえるために、“セク્યラリズム”と“セク્યラリゼーション”の二つの概念をはっきり区別しておく必要がある。“セク્યラリズム”とは理念上の政教分離の原則のことであり、“セク્યラリゼーション”とは理念とは離れた現実の法律・政治・社会のレベルでの政教分離過程である。独立後のパキスタン政府は、“イスラーム国家”をかかげながらも、明らかにセク્યラリゼーションを追及していたことができる」[加賀谷 2013: 125]として、スミスによるイスラーム国家における「セク્યラリズム」と「セク્યラリゼーション」の議論を引用しつつ、独立直後のパキスタンが、イスラーム国家を標榜しながらも、セク્યラリゼーションの路線を進もうとしていたことによって、パキスタンにおける国家と宗教の関係について常に揺れ続けることとなった点を看破している。また、大阪外国語大学に

2) 南アジアにおけるインドを中心とした研究の視点によって生まれる問題を [Hamaguchi 1997] は「インド中心主義」として議論している。

着任して間もなく発表した「インド・パキスタンにおけるムスリムの現代思想史——1」(1963)は、サイイド・アフマド・ハーン、ムハンマド・アリー、アブル・カラム・アーザード、ウバイドゥラー・シンドヒー、イクバルなど、わが国で初めて近現代インド・ムスリム思想史を詳述した論文であった。本論文中で、アブル・カラム・アーザードに関する記述において、「彼(アーザード)は、1908年イラク、エジプト、シリア、トルコなど西アジア諸国に旅行して各地でナショナリスト、革命家と接触し、彼らからインド・ムスリムが何故ナショナリズムに無関心なのか、と問われて大きな衝撃をうけた、と自ら述べている」[加賀谷 2014: 39] ことを紹介している。加賀谷先生の視座は、先述のように、南アジア・イスラームの思想史にあって新興ムスリム知識層への関心を払いつつ、彼らが越境して西アジアのムスリムと交流した点にも着目していた。近現代ムスリムが政治社会運動を展開する中で、ムスリムとしての連帯意識を意識していた事実は、現代イスラーム政治運動を理解するうえで貴重な示唆を与えてくれる。それは、第2巻に収載されている19世紀末のウルドゥー詩の翻訳である「ハーリー作『イスラームの盛衰』の本文(ローマ字訳)・訳注(その一)」(1982)にも通じており、近代のインド・ムスリムの世界観が、すでに南アジアを超えていたことを明示している。それは、加賀谷先生がアラビア語やペルシア語、ウルドゥー語の一次資料を駆使して、南アジアのイスラームの思想の解明に取り組まれてこられたことにより、南アジアのイスラームの諸相を照射しつつ、常にアラブやイランなど他のイスラーム世界への視点も注がれていたことを示している。イスラーム世界全体を俯瞰する先生の着眼点の新しさは、今もその論考に息づいている。

第3巻『近現代イランの社会と思想』(2015年)は論文45本(英語3本)、書評3点、報告等5点で構成される。「現代イランにおけるイスラーム近代主義の展開——A・カスラヴィーの文化革命思想を中心として」(1958)では、「イスラーム諸地域において展開されたイスラーム改革諸思想(代表的にワッハーブ運動)、近代主義思想が、一様に、スーフィズムを克服すべき重要なイスラームの敵と看做したことは十分注目されなければならない。……1920-30年代のインドのムスリム近代主義の指導的理論家、代表的なムスリム観念論哲学者、イクバルのスーフィズム批判の訴えは、カスラヴィーの動機と共通して、「不變」のアジアが自己変革を遂げなければならないことであった。イクバルはそのため生涯を通じて、イスラーム教徒内部の活動力をよびさますことに没頭した……イクバルは『自我の秘密』の詩(Asrār-e-Khodī. 1915年初版)において、イスラーム文化の革命と結びつけて、「自我」(Khodī)の発展をうながし、自我の確立のための対立物として、没自我的なスーフィズムを攻撃した。同書は、ペルシア古典文学の讃美者が多いインドにおいてペルシア語の代表的詩人ハーフィズを精力、氣力を奪うものとして攻撃したため、激しい非難を受けた。」[加賀谷 2015: 32] として、イランにおけるイスラーム改革思想で、ペルシア語詩人としても名をはせていたインドの詩人ムハンマド・イクバルのスーフィズム批判に触れ、改革思想とスーフィズムの相克のもと、両者が併存する状況を描出している。

南アジア・イスラーム研究の可能性

以上みてきたように、加賀谷先生の研究は、研究対象の地域としては、南アジア(インド、パキスタン)、西アジア(イラン、エジプト)が中心となり、これらの地域における近現代ムスリムの思想史を代表的な思想家を通して考察したり、国家と宗教の関係を論じたものが多くみられる。わが国における南アジアのイスラーム研究は、主に歴史研究との関連での成果が数多く出されてきた。山本達郎氏、荒松雄氏によるデリー・サルタナット期の遺跡調査の成果[東京大学インド史跡

調査団 1967-69] や近藤治氏によるムガル史研究 [近藤 2003]、小名康之氏、長島弘氏、小谷汪之氏、稲葉穰氏、真下裕之氏、大石高志氏の論考のほか、矢島彦一氏の一連の訳業に描かれたアラブ人によるインドの記録などのようなイスラーム政権期に関する文献や遺跡調査による成果が見られる。こうした研究は、深見奈緒子氏³⁾、末広朗子氏、二宮文子氏、小倉智史氏等に引き継がれている。最近では「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」(東京外国語大学AA 研共同利用・共同研究課題、太田信宏、2012-14) のような南アジアにおける諸集団の研究が進む中、二宮氏によるスーフィー教団の研究や小倉氏によるカシュミールのムスリムに関する研究成果などが発表されている。

インド独立運動期におけるムスリム政治家、思想家らに関する研究の蓄積には [近藤 1998; 加賀谷・浜口 1977] などがあった。また、人類学では外川昌彦氏によるベンガルでのスーフィー研究、子島進氏によるムスリム NGO の活動に関する研究 [子島 2002]、小牧幸代氏によるインド・ムスリム社会に見られる「カースト的要素」などの成果がある。文学研究ではイクバルの詩作の翻訳を松村耕光氏、片岡弘次氏らが続けている。松村氏によるイクバルやサイイド・アフマド・ハーンに関する研究は、南アジアのムスリム知識層が近代との邂逅においていかなる思想を抱いたかを描き出し、片岡氏はイクバルのウルドゥー語詩集を翻訳、出版し続けている。地域研究では須永恵美子氏がパキスタンにおけるイスラーム復興運動をウルドゥー語メディアで解読するといった成果も挙げている。

思想史研究としては、先述の [加賀谷 1963] や [黒柳 1967] [中村 1977] が挙げられるが、現在では小杉泰氏によるイスラーム復興研究や、イスラーム中道派研究の中での「神の主権」をめぐる議論におけるアブル・アアラー・マウドゥーディーらの位置づけ [小杉 1994]、あるいは東長靖氏のスーフィズム研究プロジェクト、小牧幸代氏の研究成果等が刊行されている [小牧 2008]。近現代において、イスラームを近代的に解釈する動きが見られたのに対し、マウドゥーディーは近現代をイスラームで解釈するという主体的改革・運動を展開した [山根 2003]。こうした近代イスラーム思想における社会論、国家論研究もまた、さらなる深化を遂げようとしている。加賀谷先生の「ムスリム連帯の先覚者アフガーニーとインド(1)」(1984) や「19世紀初頭南アジアから海路による集団的メッカ巡礼」(1988) に見られるような、西アジアと南アジアの近代イスラーム思想の交流、あるいは複数の地域で同時的に発生する動態を俯瞰する立場については、現在では [森本編 2009] のような歴史学の立場で、ペルシア語文化圏としての南アジアを再考する動きなど、興味深い成果も発表されている。また近年では、イスラーム銀行、イスラーム金融などイスラーム経済に関する関心が高まるなか、こうしたイスラーム経済論が南アジア、特にパキスタン人経済学者らによって 1950 年代に始まっていたことが長岡慎介氏によって研究され、南アジア・イスラーム研究は時代の要請に応じてさらなる広がりを見せている。ムスリムの経済活動の広がりについては、大石高志氏が 20 世紀初めの日本とインドの間で展開された経済活動を歴史的に解明する試みを行っている [大石 2010] が、川満直樹氏のようにパキスタンの財閥に特化した研究や [川満 2017]、南アジア系ムスリムの移民社会を研究する考察として、日本に在留するパキスタン系移民の調査を行った工藤正子氏、福田友子氏、山下里香氏らの研究も進んでいる。

南アジア・イスラーム研究は、インドの特定の地域、時代、社会集団を対象とするものと、ディ

3) 荒氏の研究成果を引き継ぐ研究として、たとえば「歴史都市デリーの投資開発と遺跡保存——東京大学インド史蹟調査団の再評価からの中世インド建築史」(東京大学東洋文化研究所共同研究課題、栢屋友子、深見奈緒子、2015-16) がある。

シブリン横断的な共同研究とが並行して進められている。加賀谷先生が「共同研究組織は、隣接分野の研究者との交流ができる機会をもたらし、地域研究はこれなしには成立できない」(「我が教育・研究生活とその時代——思い出すままに」)と述べたように、ディシプリン横断的な共同研究によって、南アジア・イスラームの全体像を俯瞰する研究がさらに進められることになるであろう。そして、加賀谷先生の著作を見ると、こうした俯瞰的な視点で書かれた様々な主題に関する多くの論考があることに気づかされ、その先駆性に感心させられるのである。

『加賀谷寛著作集』は、小杉泰先生、東長靖先生が知の蓄積を引き継ぐ重要性を理解してくださった上で刊行が可能となった。こうした蓄積を生かして、南アジア・イスラーム研究の新たな地平が切り開かれることであろう。

参考文献

- 荒松雄 1977 『インド史におけるイスラム聖廟——宗教権威と支配権力』 東京大学出版会。
 —— 1997 『インド・イスラム遺蹟研究——中世デリーの〈壁モスク〉群』 未来社。
 —— 2003 『中世インドのイスラム遺蹟——探査の記録』 岩波書店。
 —— 2006 『インドの『奴隷王朝』——中世イスラム王権の成立』 未来社。
 大石高志 2010 「ムスリムにおけるアイデンティティの複合性とその物象化——マッチ・ラベルからの検証」『南アジア研究』22, pp. 327–342。
 小倉智史 2015 「中世後期・近世カシミールにおける支配の正当性と宗教アイデンティティ」今松泰・澤井一彰(編)『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相——在来社会との接触・交流と変容』(NIHU Research Series of South Asia and Islam vol.8) 人間文化研究機構地域研究間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」, pp. 73–99。
 加賀谷寛・浜口恒夫 1977 『世界現代史 10 南アジア現代史 II パキスタン・バングラデシュ』 山川出版社。
 加賀谷寛, 山根聡・松村耕光・仁子寿晴(編) 2013 『南アジアとイスラーム——加賀谷寛著作集 1』(Kyoto Series of Islamic Area Studies 8) 京都大学イスラーム地域研究センター。
 加賀谷寛, 東長靖・松村耕光・山根聡(編) 2014 『南アジアの政治と文化——加賀谷寛著作集 2』(Kyoto Series of Islamic Area Studies 10) 京都大学イスラーム地域研究センター。
 加賀谷寛, 今松泰・松村耕光・山根聡(編) 2015 『近現代イランの社会と思想——加賀谷寛著作集 3』(Kyoto Series of Islamic Area Studies 12) 京都大学イスラーム地域研究センター。
 川満直樹 2017 『パキスタン財閥のファミリービジネス——後発国における工業化の発展動力』 ミネルヴァ書房。
 ギブ, H.A.R. 1981 『イスラム——誕生から現代まで』(加賀谷寛訳)(オリエント選書 9) 東京新聞出版局。
 工藤正子 2008 『越境の人類学——在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』 東京大学出版会。
 黒柳恒男 1967 「インドの思想家たち」宇野精一・中村元・玉城康四郎(編)『講座東洋思想 7 イスラムの思想』 東京大学出版会, pp. 201–235。
 小杉泰 1994 『現代中東とイスラーム政治』 昭和堂。
 小牧幸代 2008 「預言者ムハンマドの遺品信仰——南アジア・イスラーム世界の聖遺物」赤堀雅幸(編)『民衆のイスラーム——スーフィー・聖者・精霊の世界』(異文化理解講座 7) 山川出版社, pp. 40–64。

- 近藤治 1998 『現代南アジア史研究——インド・パキスタン関係の原形と展開』世界思想社.
—— 2003 『ムガル朝インド史の研究』(東洋史研究叢刊 61) 京都大学学術出版会.
- 須永恵美子 2014 『現代パキスタンの形成と変容——イスラーム復興とウルドゥー語文化』ナカニシヤ出版.
- スミス, ウィルフレッド・C. 1974 『現代におけるイスラム』(中村廣治郎訳) 紀伊國屋書店.
東京大学インド史跡調査団(編) 1967, 1969 『デリー——デリー諸王朝時代の建造物の研究』1, 2巻,
東京大学東洋文化研究所.
- 中村廣治郎 1977 『イスラム——思想と歴史』東京大学出版会.
- 二宮文子 2003 「デリー・サルタナト期のスーフィー・シャイフ——ニザームッディーンの事例を中心として」『西南アジア研究』59, pp. 1–22.
- 子島進 2002 『イスラームと開発——カラーコラムにおけるイスマール派の変容』ナカニシヤ出版.
- 福田友子 2012 『トランスナショナルなパキスタン人移民の社会的世界——移住労働者から移民企業家へ』福村出版.
- 森本一夫(編) 2009 『ペルシア語が結んだ世界——もうひとつのユーラシア史』北海道大学出版会.
- 山下里香 2016 『在日パキスタン人児童の多言語使用——コードスイッチングとスタイルシフトの研究』ひつじ書房.
- 山根聡 2003 「南アジア・イスラームの地平——イクバルとマウドゥーディー」小松久男・小杉泰(編) 『現代イスラーム思想と政治運動』(イスラーム地域研究叢書 2) 東京大学出版会, pp. 85–116.
- HAMAGUCHI Tsuneo. 1997. “Pakistani Studies in Japan: A Bibliographical Essay,” *Asian Research Trends: A Humanities and Social Science Review* 7, The Centre for East Asian Cultural Studies for UNESCO, pp. 87–105.